

隨泉寺寺報

平成 23 年 (2011 年) 4 月号 第 488 号

TEL 082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

春季永代経法要

講師 順覚寺住職 檜崎正道師

講題 『ようこそ親鸞様』

■永代経法要 ◇ 永代経法要について

生前中に仏法を聞き得た喜びとともに、「子や孫へ教えを聞くことの大切さが伝えられていくように」との願いをこめて、永代経懇志をあげられた先祖の遺志が、この『永代経法要』の基になっています。ご先祖の願いや、永代経懇志のおかげで寺院が護持され、仏法を聴聞させていただけるのです。「永代経法要」には、家族揃って、お聴聞させていただきます。『永代経』とは、『永代読経』の略で、「永代に渡ってお経が読まれる」という意味です。したがって、尊いお念仏のみ教えを伝えてくださった、ご先祖の遺徳を偲び、私自身が聞法に励んで、今度はその法灯を子孫に伝えていってこそ、その名のり『永代経』と言い得るのです。

◇ 永代経法要の心は

『永代経の心』は、次の二つだと言って良いでしょう。

1. 子や孫が、代々み教えを聞き慶ぶこと
2. お寺が、永代に護持されていくこと

4月の法座予定

4月10日……………掃除 中須賀・モンライ
4月14日昼席午後1時より……………春季永代経法要
4月14日夜席午後7時より……………出張法座 モンライ集会所
4月15日朝席午前10時より……………法要後 仏婦総会 おとき
4月15日昼席午後1時より……………春季永代経法要
5月 2日午後1時より……………作品づくり
5月 2日午後6時より……………門信徒会本部役員会

☆ 東日本大震災

三陸沖を震源とする戦後最大の震災「東日本大震災」が発生致しました。多くの尊い命が失われ、多くの被災者が苦しみ、日本国民すべてが深い悲しみを受けました。余りにも悲惨な状況に言葉を失い、多大な被害を目にするたびに、涙が溢れました。

テレビから流れる死亡者の数、被害の様子。私達はみんなそんな情報だけ見ながら助けに行けない自分と闘っています。くやしい。かなしい。心配で、心配で涙が止まりません。

隨泉寺も18年前集中豪雨で裏山が崩れ、庫裏の離れが全壊するといった被害を受けました。あのときのことを思い出して胸が痛みます。ただ呆然として立ち尽くしていた自分を思い出します。

でもあの時、ご門徒の皆さんが、日ごろは足が悪いおばあちゃんや、腰が痛いおじいちゃんまで長靴を履いてスコップを手にして、お寺が大変だと駆けつけてくださいました。

それがどれだけ勇気付けられたことか、友達が着るものが無いだろうと衣類を持って駆けつけてくれました。ほんとに助かりました。世界中の人が心配しています。応援しています。復興に向けて限りなく遠い道のりですが、きっと明るい未来が訪れると信じています。

テレビの映像を見ながらつくづく思うのは、「想像を絶する」ではなく「人間には想像が及ばないことがある」という事実をいつも心に留め、謙虚に事にあたるということです。



原子力発電所の行く末が気にかかります。

高校野球の選手宣誓に心打たれました。

「宣誓。私たちは16年前、阪神淡路大震災の年に生まれました。

今、東日本大震災で多くの尊い命が奪われ、私たちの心は悲しみでいっぱいです。被災地ではすべての方々が一丸となり、仲間とともに頑張っておられます。人は、仲間を支えられることで大きな困難を乗り越えることができると信じています。私たちに今できること。それはこの大会を精いっぱい元気を出して戦うことです。がんばろう！日本。生

かされている命に感謝し、全身全霊で正々堂々とプレーすることを誓います」

☆御礼

「東日本大震災」の義捐金を3月14日～15日で集めました。全部で79,050円あり、早速本願寺を して送らしてもらいました。ありがとうございました。

☆御礼

永代経懇志	金	貳拾萬円	西川信彦殿	故	西川 博様	特	永代経志として
永代経懇志	金	拾萬円	樽田勝昭殿	故	樽田チサエ様	特	永代経志として
永代経懇志	金	拾萬円	山下恵美子殿	故	山下 武俊様	特	永代経志として

☆御礼

門信徒会へ	金	一封	西川信彦殿	故	西川 博様	香典返しとして
-------	---	----	-------	---	-------	---------

4月 大きな願いに目覚める以外に ほんとうの自分に育てる道はない

お釈迦さまがご誕生なさった四月。花まつりの四月。木や草がじっとしてはいられないというように芽をふく四月。何ものにもかえられない大事なお子さまが入園なさり、新しい出発をなさる四月。生きとし生きるものがいのちの不思議を輝かせる四月。生命の大合唱のひびきわたる四月。

私の勤めさせていただいた学校のそばに天にそびえる檜（けやき）の森がありました。その古い檜の大木が芽をふく四月の感動を私は忘れることができません。私はそれを仰ぎながら、年をとるにつれて感動を喪いがちな私ではあるが、新しく入学してくれた子ども、新学年をスタートする子どもたちに、生きるということのただごとではないことに目を覚まさせ、伸びずにはおれない芽を育てるためには、私自身が、あの檜のように若木よりももっと美しい、もっと新鮮な芽をふかなければならないのだと、自分に言い聞かせたことでした。

人間は五千とおりの可能性をもって生まれてくるというのが、今日の学者の先生の定説だということです。せつかく人間に生まれさせてもらいながら、狼にさらわれ、狼のくらしの中で狼に育てられたために、生き方のすべてが狼になってしまっていたという二人の女の子の実話を思い出します。殺人鬼も、泥棒も、爆弾犯人も、問題少年も、みんな、誰かが、せつかくの人間の子どものを、そのような可能性の方向に突っ走らせてしまったのです。お釈迦さまも、お若い頃、たくさんな可能性の中でお迷いになり、お悩みになりました。けれども、遂に、この大宇宙の根源のところではたらきづめにはたらいている大きな願い（本願）に目覚められ、この願いに生きる以外に自分をほんとうの自分に育てる道はないことを自覚なさり、それを私たちに教えてくださったのです。

人生には、腸の断ち切られるような思いをしながらも断念しなければならぬことがあります。人間の愛の手の及ばぬことがあるのです。その人



間の愛の悲しい断念を包み、支えているのが阿弥陀仏の大慈大悲の本願でした。人間の手のとどかぬところにこそ、如来の大悲の手は確実にさしのべられているのだと聞くと、自分の力なさを悲しみながらも、希望と光がさしこんでくるのです。それが如来より与えられた本願の念仏のなかに感じられる豊かに開かれた世界なのです。

親鸞聖人は、

小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもふまじ
如来の願船いまさずは 苦海をいかでかわたるべき

と讃詠されました。

聖人がこの和讃をよまれたのは八十五、六歳のころであったと思います。八十四歳のときには、断腸の思いをもってわが子善鸞を義絶し、父子の縁を切らねばならなかった悲しい事件がありました。わが子一人を救い切れない自分の無力さが、どんなにつらかったか。「義絶状」のなかに「かなしきことなり」と記された一語には、万感がこもっていました。この事件が聖人に聖道の慈悲の悲しさを思い知らせたといえましょう。小慈小悲さえも行ぜられない愚かな身で、人を済度してやろうというような思い上がったことは思うべきではない。このような浅ましく、申しわけない私を救うて、愛と憎しみを超えた領域にあらしめようと誓願された大悲の本願に身をゆだねて念仏を申すところのみ、人間の愛の限界を超える大道があるのだといわれるのです。

仏になるということは、自他をへだてする「私」という小さな殻を破られて、万人と一如に感応しあい、自在に人びとを利益することのできる大慈大悲の身となることです。それはいま、阿弥陀仏がなされている広大な救いのはたらきに参加し、「おもふがごとく衆生を利益する」身になることです。親鸞聖人は、それを還相（還ってくる相）ということばであらわされてきました。浄土に生まれさせていただくことを往相（浄土へ生まれて行く相）といい、浄土で仏としてのさとりを開いたものが、煩惱業苦に悩む人々を救うために、ふたたび煩惱のうずまく迷いの世界へ還ってきて、救済活動を行いますから、それを還相といわれたのでした。

こうして念仏という如来よりたまわった本願の大道に帰入することによってのみ、すえとおらない人間の愛の悲しみと空しさも救われてゆくのです。

